

アジアの風

第12号
2007年1月10日発行

題字：宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター

第8回アジア児童文学大会 韓国ソウル市で盛況裡に終了



第8回アジア児童文学大会（兼・第2回世界児童文学大会）は昨年8月21日から25日まで、大韓民国ソウル市のインペリアル・パレス・ホテルで開催され、アジア各地からの参加者310名に加えて欧米等からの講師11名の参加もあり、盛況裡に終了しました。日本からの参加者は、『アジアの風』第11号でお知らせした通り23名でした。作家の丘修三さんは病院で人工透析を受けながらの参加、また鹿児島から参加された中村悦子さんは80歳を超える高齢でしたし、そのほか70代が7人という、かなりの高齢集団でしたが、皆さん無事に5日間の日程を終えられました。

第1日18時からのレセプションでは、参加者を代表して当センターの畑中圭一会長が祝辞を述べ、その中で「アジアにおいては政治的あるいは軍事的緊張がなかなか緩和されず、諸国間にはさまざまな解決すべき問題が横たわっている。しかしその反面、民間の文化的・経済的交流はどんどん深まっている。こうした文化交流の一環として、児童文学による交流や協力をより一層深めていきたい。」という決意を表明しました。

第2、3日は講演ならびに論文発表が行われました。今大会のメインテーマは「平和を志向する児童文学」。日本からの講師・西田良子氏は「平和の種をまく」と題して講演をされました。西田氏はまず高木敏子の「ガラスのうさぎ」を取りあげ、これからの児童文学作家は新しい時代に対する鋭い洞察眼と、独自の視点をもつことが必要だろうと述べました。すなわち、自国の立場に固執せずに世界全体を視野にいれ、さらに歴史的経緯を考慮しつつ、国際的見地と市民的感觉でものごとをとらえていくべきだということです。西田氏はさらに大塚敦子の写真絵本『平和の種をまく・ボスニアの少女エミナ』を紹介し、こうした絵本から平和の道を見つけだし、「平和の種まき」を広げてほしいと結ばれました。この2日間に11の講演と、20の論文発表が行われました。（日本からの4人の論文要旨は2頁に掲載）

第4日は国立中央博物館や景福宮などを見学、夕食をとりながらの閉会式で、翌朝解散となりました。

第8回アジア児童文学大会

日本からの発表論文要旨

8月22日(火)午後

★畑中圭一

「在日コリアン文学について—詩人・作家の言語意識」

近年、児童文学においても在日コリアンの詩人・作家が高い評価を得るようになったが、これらの詩人・作家は母国語ではない日本語で書くことについてどんな思いを持っているのか、また彼らがそのことについてどうのうしろめたさや葛藤をどう克服しているのかを具体的に分析した論究。「日本語ではない日本語」という新しい言葉を生み出すことで在日文学は独自の道を歩みはじめるという結語は意味深い。

★きど のりこ

「アジアにおけるファンタジーの展望と未来」

日本のファンタジーが80年代以降、日本的風土に根ざした素材を取りあげ、90年代にはアジア的異世界を舞台にしたものが書かれて多様な広がりをもっていること、また韓国や台湾にもアジア的想像力ともいうべき広がりをもったファンタジーが生まれていることを指摘し、アジアに暮らす私たちに「共通した夢の素材」から生まれる想像の物語が、国と国との障壁を越えて広がることで、若い人は豊かな未来を享受できるという展望を示した。

8月23日(水)午前

★たに けいこ

「絵本で結ぶ人と自然—共生志向の児童文学」

人間と自然の共生をテーマにさまざまな童話や絵本を書いて地球環境保護活動に取り組んできた自らの体験を述べ、その根底に若い頃学んだ「生花」の心、すなわち大自然と人間の融合する「和」の心があることを指摘し、さらにこうした絵本づくりを通して国際的な交流が深められつつあることを報告した。

8月23日(水)午後

★キム・ファン

「環境をテーマにした韓・日の児童文学への提言」

韓国と日本の自然は密接な関係にあり、それぞれの生き物を守るためにはお互いの生き物をよく知らなければならないということを、コウノトリを例に説明し、さらにゾウを通して韓日の悲しい歴史を見つめ直した近著『サクラ—日本から韓国へと渡ったゾウたちの物語』のことや、生き物を通じた韓日の歴史や南北交流を書いた遠藤公男のノンフィクションを紹介しながら、環境保護についての両国の協力を描くことによって両国の歴史認識の溝を埋めるような作品への志向を表明した。

陳伯吹生誕百年

記念会に参加して

きど のりこ

2006年8月8日～10日、中国・上海近郊の宝山地区(最近上海市宝山地区となる)で、1997年に世を去った作家陳伯吹(中国語読みではチェン・ポー・チュイ)の生誕百年記念会とシンポジウムが行われ、日本からは中尾明さん、中由美子さんと私が参加しました。宝山は、長江と黄浦江が交わる地点にある、製鉄などで有名な工業地帯で、上海のベッドタウンでもあります。また過去には日本をはじめ外国からの侵略者の上陸地点でもあり、現在は「抗戦記念館」もある愛国教育の拠点ともなっています。まだここが河口の寒村だった百年前の1906年に、作家陳伯吹は宝山の羅店というところに生まれました。中国では1917年からの「文学革命」による思想革新運動が1919年の「五四運動」につながっていきませんが、ごく若い頃その影響を受けた陳伯吹は、やがて教師や雑誌編集者を経て、中国児童文学の「第一の黄金期」とされる1950年代からすぐれた児童文学を発表し、文革による11年のブランクはあったものの、現代中国児童文学の発展に大きく寄与しました。私財を投げうって「園丁賞」を創設したことで知られます。残念ながら日本では、単行本では『ネコ大王のぼうけん』(1955)しか翻訳されていませんが、日中児童文学美術交流センターが発行している「虹の図書室」10号(1998)では代表的な短編が訳出されています。同センターの設立時にも深く関わられ、私も上海で以前お目にかかりましたが、小柄ながら内側から光を発している印象的な方でした。

今回の記念会は、作家の育った羅店にある立派な国際センターで行われました。空港には上海少年児童出版社の沈洵澄さん、周基亭さんが迎えにきて下さり、車で向った宝山には、瀟洒な北欧風の集合住宅が立ち並んでいてびっくり。設備の整った国際会議場で、北京や香港からの参加を含めて50名以上の人々が、陳伯吹とその作品をめぐって熱のこもった発表と討論を繰りひろげる有様は壮観でした。中尾明さんも発表され、私も「陳伯吹先生の作品について」という短い発表をしました。任大星、任溶溶、秦文君、李仁暉、沈振明といった方々にもお会いすることができ、また蔣風、王一方、潘明珠といった方々にはその後のソウルでの「アジア児童文学大会」でも再会を果たせたのでした。宝山区の中心街の文化センターの一画には、この行事にあわせて立派な「陳伯吹記念館」が開館し、それを見学することができました。現代中国にとっても青少年の健全育成は大きな課題であり、今回の行事は一家の顕彰を超えて、青少年育成のための国家的なキャンペーンでもあるという印象を持ちました。

IBBY マカオ大会に参加して

成 實 朋 子

2006年9月21日から23日にかけて、IBBY（国際児童図書評議会 International Board on Books for Young People）の大会がマカオで行われた。本来の予定地北京からの突然の変更、しかもカジノで有名なマカオでの開催とあって、落胆の色を隠せない人も少なくなかった。

変更理由は明らかにされなかったが、IBBYが民間団体であることから、いかに規模が大きくとも、首都北京での開催はふさわしくないとの判断で最終許可が出なかった、ということらしい。改革開放の進んだ今となつてなお、中国では一定人数以上集まる、ましてや外国人が多数参加する会議や大会の開催には、政府の許可が不可欠である。政治・政府関係の公のものは北京で、経済・文化関係の民間のものは上海を中心とする地方都市でという不文律は、どうやら今も有効であると見える。

さて、そんな突然の変更にも関わらず、全体の参加者は四百名を越える盛況ぶり。正式な名簿が配られなかったので定かではないが、日本人参加者はおそらく最多で四十余人。連日朝8時30分から夕方6時までという強行スケジュールで、午前中に全体会議、午後に分科会や児童論壇（子どもたちの英語によるスピーチ）、朝日賞等諸賞の発表、夜にはアンデルセン賞の発表と授賞式が行われるという盛りだくさんな内容であった。場所は最近出来たばかりの澳門漁人碼頭（Macau Fisherman's Wharf）にある会議室で、周囲にはアトラクション施設もあったのだが、参観する時間は全く無かった。

大会初日に行われた全体会議においては、韓国の康禹鉉（カン・ウヒョン）氏や中国の秦文君（チン・ウエンチン）氏のスピーチがあった。日本でもおなじみの絵本作家康禹鉉氏は、韓国・ナミ島における国際図書フェスティバルを、自作の映像を効果的に交えながら紹介。『シャンハイボーイ チア・リ君（男生買里）』の作者で、中国一の人気児童文学作家秦文君の登場には、中国側から温かい拍手が注がれた。もっとも秦文君氏の作品は欧米では翻訳が出ていないので、大会参加者の殆どが彼女の作品を知らなかったのは、非常に残念なことであった。それとは逆に今年度のアンデルセン賞受賞者マーガレット・マーヒー氏の登場とユーモラスな講演に、会場は笑い拍手で包まれたが、彼女の作品は中国では翻訳されていないため、中国側参加者の反応は今一つといったところであった。

このように大会全体を通じて、中国側参加者とその他の国々の参加者の間には、終始ある種のズレが生じていた。「言葉の壁」もあってか、他国の参加者たちがプレゼンテーションソフトを駆使して華やかに自国の児童文学をアピールするのに対し、中国の参加者達は自国の児童文学のPRに積極的には成り得ず、これは中国児童文学が世界展開を目指していく上においては、適切なことではなかったと言わざるを得ない。

このように終始「言葉の壁」を感じた大会であったが、モンゴルの移動図書館の活動で朝日賞を受賞したダッシュ・ドンドク氏は、「言葉の壁」もものともせず、朗々とモンゴル語で自作の詩を朗読して謝辞に代え、その悠揚たる態度とモンゴル語の音韻の美しさに、会場全体からも惜しみない拍手が送られていた。我々も少しはこの豪胆さ(?)を見習うべきなのかもしれない。

新刊紹介

パラパラ山のおばけ

ライマー作 中由美子訳 岩崎書店刊
台湾の人気作家ライマーの絵本。しろブタのルルがヤマアラシの影をお化けとかん違いたために、ビーだま村に起きた大騒動を描く。一面面にさまざまな出来事を描く画法で、「絵を読む」楽しさを味わわせてくれる。

導かれてネパールへ

もり・けん著 高木書房
当センターの会員で、ハーモニカ奏者でもある童謡詩人もり・けん氏のネパール訪問記。政情不安定なネパールでハーモニカの演奏会を開きながら、人々とふれあっていく草の根交流が印象的である。

雑誌・機関誌紹介

◇小さい旗 122号

郭雪波作 水上平吉訳「海じいさまと雪オオカミ」
楊紅櫻作 馬場与志子訳「マーさんとピョンピョン人形」

◇中国児童文学研究会通信 第108号

馬場与志子「第2回世界児童文学大会 in ソウルに参加して」
《例会報告》
申英煥「日本と中国の七夕絵本について」
寺前君子「小説『中国うさぎ ドイツの草』について」
成実朋子「2005年から2006年に出版された中国児童文学関連の本情報」

風のたより

シンポジウム・プレ研究会

台湾絵本の現在

- ◇1月27日(土) 14時から16時まで
- ◇大阪府立国際児童文学館・セミナー室
- ◇定員30名(先着順)。参加費無料。

3月に開かれるシンポジウムに向けて、頼馬氏の作品を中心に台湾の絵本についての研究会が開かれます。

コーディネーター：三宅興子

報告者：成実朋子、中由美子、鈴木穂波

申し込み：大阪国際児童文学館

Tel.06-6876-8800

シンポジウム

アジアの絵本の世界へようこそ

～台湾と日本の絵本～

- ◇3月4日(日) 13時から16時まで
- ◇大阪府立国際児童文学館講堂
- ◇参加費無料

『あわてんぼうさん』『パラパラ山のおぼけ』が日本で翻訳出版されている台湾の絵本作家・頼馬氏を招き、日本の絵本作家・長谷川義史氏と絵本の魅力について語ってもらうシンポジウム。コーディネーターは中由美子氏。詳しくは大阪国際児童文学館のホームページで。

<http://www.iiclo.or.jp/>

「いきものがつなく日韓」

第1回「子どものための感動ノンフィクション大賞」を受賞した作家のキム・ファンさんが、9月から『京都新聞』に「いきものがつなく日韓」を連載中。週1回、30回連載の予定。

こんな催しが行われました

シンポジウム

アジア絵本から見えてくるもの

～和歌山静子さんを囲んで～

- ◇2006年6月24日 法政大学市ヶ谷校舎

韓国の絵本展

- ◇2006年9月15日～11月30日
- ◇安曇野ちひろ美術館

アジアの物語絵巻の現代絵本への

展開 ◇木城えほんの郷(宮崎県木城町)◇

- (1) 2006年9月16日～10月15日
- (2) 2006年10月21日～11月19日

アジアの土の香り民族のものがたり

◇木城えほんの郷

2006年11月23日～12月24日

木城えほんの郷

緑の山々に囲まれた宮崎県木城(きじょう)町の石河内に10年前開設された絵本の専門施設。主に絵本原画の展示をおこなう「森のえほん館」、本屋さんとカフェがある「森のきこり館」をはじめ、宿泊施設の「森のコテージ」や「森の芝居小屋」、「水のステージ」などがある。

アジアの絵本についての展示やフォーラムなどの開催に力をいれている。2005年には「韓国の絵本原画展」や「フォーラム・いま韓国から広がる絵本の世界」が開催された。

◇ ◇

休館日：毎週月曜日(祝日の場合、翌日休館)

開館時間：10:00～17:00

所在地：宮崎県児湯郡木城町石河内475

電話：0983-39-1141

<http://www.mnet.ne.jp/~ehon>

Email: ehon@mnet.ne.jp

あとがき

2006年は、アジアにおいて児童文学に関する国際的な交流がさまざまなかたちで行われた年であった。ソウルで、マカオで、上海で規模の大きい集りが開かれ、世界のりびとのアジア児童文学に対する関心も、徐々にではあるが高まっていくものと思う。

ソウルでの大会のあと、市内のある書店をのぞいてみた。中規模の書店であったが、文庫本を含めて日本の本が実に数多く置いてあること、ペンギンブックスのような英語の本も多いこと、置かれている絵本の質がとても高いことなどが印象に残った。床にすわって本を読んでいる子どもがいて、かつて日本でも見受けられた情景だと懐かしさを感じた。そこには、今の日本では感じられない熱気のようなものと、国際的な視野の広さを感じたのである。

韓国ではユニークな子ども図書館が次々と生まれているという。真の文化交流というのは、お互いがいいものを出し合って刺激しあい、それぞれが成長していくことではないか、と改めて考えた次第である。

(畑中圭一)